
Change-Everyday

利恩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Change・Everyday

【Nコード】

N4770U

【作者名】

利恩

【あらすじ】

篠崎 零夜 ・しのさき れいや ・

彼は一般の高校生である。

夢を見たその日、彼は不思議な体験をし、それについて考えすぎ混乱をし、またやがて眠りにつく。

そして、翌日起きて目にしたものは…。

序章 夢（前書き）

皆さま、初めまして。

利恩りおんと申します。

初投稿なので誤字脱字があるでしょうし、読みにくかったり意味がわからなかったりすると思います。

何よりもつまらないものだったらどうしようかと・・・（gkbr

今回の小説、カテゴリにゲーム名ありますけど…

実際キャラを出す予定はありません。

ただ魔法、技の名称を引用させていただいていきますので、一応二次創作という形で投稿させていただいております。

もしかしたらキャラを出すかもしれませんがね！

でもって投稿は不定期に行います。

すっげ遅くなったりしたら申し訳ありません。

それでは、お楽しみいただけるか不安MAXですが、よろしく願
いいたします！

序章 夢

夢を見ていた。

それは今までとは何ら変わらない日常。

朝起きて、学校へ行ってつまらない授業を受け

家に帰ってゲームして寝る。

そんな変わりもしないくだらない日常。

人は見た夢を忘れてしまいうらしいが

つまらなすぎて逆に鮮明に覚えていた。

夢を見ているんだぞ？

何でこんなつまらないものを見なくちゃならないんだ？

くだらない……。

どうせなら綺麗な女の子とあんな事やこんな事をしてる夢が良かったのに……。

そして僕は
目を覚ます・・・。

第一次とりあえずキャラ紹介(前書き)

いきなり話進めても「え？誰？」とかなるので
キャラ紹介をやって行こうかな。…なんて…。

キャラが増えるたびこれが行われますw

第一次とりあえずキャラ紹介

名前：篠崎 零夜しのさき れいや

年齢：16（高二）

性別：男

性格：ちよつと冷静

趣味：ゲーム

概要：一人称が「僕」の今どき珍しい普通の高校生男子で、本作主人公。

幼馴染と共にとある二流高（実は略称でも二高である）に通っている。

勉強もスポーツもそれなりにできる。

顔立ちは悪くない…：くらいの認識しか本人はしていないが実際周りがハンカチを噛んで悔しがるほど良い。

幼いころに事故で両親を亡くし、現在一人暮らし中。

兄がいるとは聞いているが出会えたことは一度もない。

一人称は「俺」の方が似合うと言われ早10年。

名前：如月 咲夜きさらぎ さくや

年齢：16（高二）

性別：女

性格：天真爛漫

趣味：零夜と（で）遊ぶこと

概要：零夜の幼馴染。出会ってから一度も零夜と距離が離れたことはない。

零夜と共に二高に通う元気っ娘。

勉強もスポーツも顔もスタイルも最強である。

両親を亡くした零夜にとって、うっとうしくはあったがかけがえのない「家族（妹）」である。

零夜に恋心を寄せ、激しくアピールするが、零夜はただのじゃれあいだと勘違いしている。

：まあ、こういうヒロインは報われないよね（殴

ちなみに某パッド疑惑のメイド長さんとはまったく関係ないです。

わからない人はそれでいいんです。

一章 夢から始まる現実（前書き）

作「やっと本編だじえ！」

零「ちつと進行状況おそくねえか？」

作「大丈夫だ。問題ない。」

零「そうかよ……」

作「ほら、出番だぞ。行ってこおい！」

零「ウツゼ……。はぁ、わかったよ。」

一章 夢から始まる現実

そこは自分の部屋だった。

もちろん、何も変わってはいない。

何もかもが昨日のままだ。

適当に制服に着替えてリビングへ。

幼い頃、事故により父母に先立たれ、以来僕は一人で暮らしている。実は兄がいるとか何とか聞いてはいたが実際に巡り会えてはいない。

トーストをかじりテレビでニュースを見ていると

「そろそろ、かな…。」

ピンポン

インターホンの音が響く。

「まだ飯食ってる。開いてるから上がって待ってて。」

インターホンに応答する。

この時間にやってくる輩はあいつ一人だろう…。

「零夜ああー!!」

「ぐっはあ!!!!」

いきなり入ってくるやいなやダイビング。

こいつは如月咲夜。

「きさらぎ」が苗字で「さくや」が名前。

僕の幼なじみにあたるのかな。

……………ああ、そういえば。

僕は篠崎零夜。
しのまきれいや

一人称は「僕」。絶対「俺」のが似合うと言われつつけ早十年。

僕達とはある二流高校に通うごく普通の高校生だ。

そうだな、高校は以下「二高」としよう。

まあ実際に略称でそう呼ばれてるし。

咲夜は彼女……………

みたいにいちいち付き纏ってくる。

うっとうしいが、それを人に話すと決まって殴られる。

何故だ……………!?

「咲夜。重い。」

「レディに「重い」は禁句だZO」

いきなり首を締めてくる。

「あががが！ギブギブ！」

必死で抵抗したらすんなり離してくれた。

なんという首締め柔道CCC……………辛い……………。

そんなこんなで軽い朝食を食べ終わる。

「悪い咲夜。待たせた。」

「いいよいいよ。さ、行くところ？」

そう言って手を伸ばしてくるが華麗にスルー。

手を繋げ、とでも言っているのだからそれがそうはいくか。

「も〜！零夜のあほ〜！」

「何とでもいいたまへ！」

右手に川を見てダツシュ！！

「…そら捕まるわな。」

十数秒後、咲夜の腕の中にいた。

こいつは運動神経よすぎるんだったな…。

「もー、何で逃げるかな〜。」

咲夜がぼやく。

つか全然抜け出せねえな。何このロック。

「アハハハハ！兄ちゃんだっせえ！」

そう僕をけなして脇を過ぎていくのは近所の小学生たち。

「くっそあのガキ共…！」

そう言った僕の顔に浮かんでいたのは笑顔だった。
僕の抵抗がなくなったのを感じて咲夜が解放する。
僕たちは二人肩を並べて歩いた。

…その時

「んあ？」

こんな光景見たことがある。

既視感デジャヴってやつかな。

まあ人間だれにもこういうことはあるだろ。
そう思って気にしなかった。

その後何の問題もなく高校：二高に到着。
教室に入るなり出迎えたのは

「お、お二人さん今日も仲良しだな。」

と冷やかす声。

その主はわかっている。

たけはら
竹原 優太。

中学からの親友だ。

基本的に人の嫌がる事はしないが、からかう程度はよくする。

スポーツ万能、成績優秀で顔も抜群に良い。

主人公ブレイカーである。

「もうっ！アツアツだなんてそんな…！」

などと後ろで咲夜が情報を多少改ざんしながらクネクネしているが

……

「優太。僕達がそんなんじゃ無いのは知ってるだろ。」

それを無視して、優太にこう言いつつ席へ向かう。

自分の席から少し離れた所から鞆を放る。

鞆は見事に机の上に着地。

それと同時に椅子を引き、僕は座る。

「……何だ今の流れるような作業は。」

優太が何か言っているがほかるところ。

その後チラッと横を見ると、まだクネクネしている咲夜を必死に抑えようとしている優太の姿が見えた。

あいつは自分が蒔いた種をしっかりと片付けてくれるから助かる。

授業が始まり、少しボーっとしていると

「はい、篠崎君。ここの答えは？」

やっべ当てられた！

「えっと…… - 2 m 2、ですか？」

「正解！流石篠崎君ね。」

な、何とか助かった…。

これからは気をつけなきゃな…。

「……………んあ？」

こんな事を前にも思ったような…………。

…またか。

デジャヴ
既視感。

本日二度目のご来店である。

今日は一体何なんだろう。

「なんだかなあ…。」

そう呟いて空を見上げる。

空は雲一つ無く、真っ青で綺麗なもんだった。

昼時。

皆は肩の力を抜き、あちらこちらで談笑が始まる。

「零夜。飯食おうぜ！」

優太と弁当を広げるのが日課だ。
だが今回は…。

「悪い。今日は…」

「ああ、アレって今日だったか。」

アレ、とはいわゆる…

「俺もついてって良い？どうせ断ってすぐに終わるんだろ？」
「……好きにしてくれ。」

日の昼休みに屋上で待つ。

ちょっと前にそんな内容の手紙をいただいた。
ま、単なる告白だろうけど。

優太と話しつつ階段を上がる。
屋上へ続く扉の前で立ち止まる。

「…遂に、ここまで来たか…！」
「どこのRPGだよ…。」

優太のボケに突っ込み…

「悪い。ここで待っててくれ。」
「了解。傷つけないように断れよ。」
「ああ、わかってるさ。」

優太に後押しされ、扉を開く……………。

「ん〜……。やっぱり泣いてたな。」

「……………ああ。」

一仕事終えて優太のもとへ。
断ったら泣かれた。

「……………まあ、いつもの事だよ。」

「そうだな。俺も何回か経験あるし。」

それでもやはり、罪悪感を感じずにはいられない、な……………。
なんて考えてたら

「うをつつ!!」

階段を踏み外した。

「ちよつ！おまつ！」

優太がしっかりと掴まえてくれた。
だがしかし……………

「……………うあ？」

異常だ。

三度目の既視感。
デジャヴ

流石に多すぎないか？

「おいおい零夜、大丈夫かよ……………零夜？」

僕の異変に気づき、優太が声をかけてくる。
僕は何を思ったか、優太に全てを話した。

「…はっはーん。お前疲れてんだよ。」

そうきたかー！

「まあ冗談はここまでにして…。まあそういう事もたまにはあるんじゃないか？」

でもやはり回数が気になる…。
きつとこれからも増えつづけるはずだ。

「…というより、奇遇だな。」

「は？」

「俺も感じてたんだよ。デジャヴ。数回に渡って、な。」

何だって……？

じゃあやつぱただの……いや。

偶然にしては僕と優太の既視感を感じた時間が一致しすぎている。
何か理由が……？

など考えていたら、優太が提案をしてきた。

「ここは一つ、二人で早退しないか？」

「早退？」

少し意外で戸惑った。

優太は続ける。

「そ。それで二人で謎を解き明かそうぜ！」

……たまにはいいかも知れないな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4770u/>

Change-Everyday

2011年10月8日20時22分発行